普寂律師と大我上人

――特に台宗性惡說について――

伊藤眞徹

一

德川時代の佛教界に於いて異色ある佛教學者として近時注目せらるゝは普寂德門和上にして、その學風は夙に自由討究批判的研究を樹立し前人未發の蘊を開く處多し、而して普寂と時代を等しくし、その生涯の經路に多分の類似點を有し、しかも當時の淨土宗學界に同等の重きをなしその所論を比肩せしめたるは大我上人なり。

兩師はその出生及び寂年を殆んど等しくし(註一)、その淨土宗歸入以前に於いて一方は親鸞の流れを汲み、他は弘法の三密に心を傾けその歸入の時期も前後し一方は淨土宗に於ける當時の新思潮律僧派に投じ、他は正風派とも稱すべき眞〻僧正の門を叩いて如法修道に精進せられたのである、而して共に晩年を東部に送られしは兩師の思想的交涉を考察する上に於いて興味深き點なりと思はれるのである(註二)。

大我は普寂を目すると恰も法賊怨敵の如く排擊すること甚し、その原因を推求するに寶曆十三年(一七六三)以後天下第一の檀林增上寺に於て講師となりし故なり(註三)。卽ちその當時檀林に於ては體面保持上所化衆教養には如何なる

學匠と雖も山外に師を求めざるを以て不文律とせしものゝ如し。その一例として嘗て鳳潭、湛惠等の大德を招聘せんとする企てありしも頓秀理天等の反對に遭ひその事は遂に成らざりしことあり。その反對理由は檀林に講師なき故に他より請招するかと他宗に嘲笑せらるゝを慮りしものなり。かくの如くなれば檀林に掛錫せし事なく且又律僧を以て自他共に目する普寂の山內に入つて傳統と權威を誇る芝山三千の大衆の爲めに講經演敎するを嫌惡するものは獨り大我のみには非ざりしものと考へらる。

普寂は殆んどその全勢力を餘乘に傾倒し宗乘の攻究闡明には寧ろ疎かりし事とその出生が眞宗なりし爲め痛く大我の痛擊する處となり、その淨土宗に改宗せる動機を大我は「續芝談」の中に「普寂有レ謀僞作二比丘一誑二惑愚人一」と云ひ、その謀とは、一向宗はその風習として僻遠の地に生れし者は院家能家となること難し、然るに自身は北勢の出生なれば如何に學殖ありとも榮位を襲ふこと不可能なれば、他宗に轉じて人に尊敬せられんとす、されど禪は速疾に禪師になること能はず、淨家に轉じ檀林に入寺せんも學課九部に分れ、傳法亦年數の定めあるを以てその中途へ橫入する事は許されざるを以て湛惠律師を誑惑して弟子比丘となり愚人に尊重せられんとせりと云ふ。されど此處に深重の考慮を要するは、普寂を緣山に招聘せる鸞山に就てゞある。しかるに鸞山の師は華頂門主鸞宿にして且つ增上寺の靈應大僧正の法緣なれば此點より見るも邪流の普寂を敢えて山內に入れて三千の大衆を惑はす理なき筈なり、故に普寂の學說の邪正を最も良く考究し、しかる後その弊なきを以て事を計りたる如く考へらるゝも大我は然らずとなし、その所以を明して鸞宿も一向宗の生れなるが故に淨土傳燈總系譜を撰述して親鸞を以て吉水の一派となして毒を海內に流し、靈應は一向宗の出にして淨土に敵する心ありしものなるや大黑名號を雜書して愚人に授與し、選擇集に敎誡し給ふ「豈捨二百卽百生專修正行一而執二千中無一雜修雜行一乎」に違脊するものなりとし、かくの如き二大僧正の習氣を受けたる鸞山は普寂に與

して邪風を檀林に振ひ、安心を僻越し起行を雜亂すこてその鋭鋒各處に及び當る可らざるものあり。

かくの如き普寂を淨土宗法の邪正を評定する芝山に講師こすれば、大衆はその邪說を信受しその受くる弊害少しこせずこて次の如き十條を數へられたのである。

一、淨土を變化こし、淨經を終教こし、念佛を淺麁こし、往生を難得こすること。

二、圓頓菩薩戒の血脈を抱ながら無戒こ思ひ、藏漸聲聞戒を受て有戒こ思ふこと。

三、愚推憶談の邪義を信受して、宗流兩祖の相傳の正義を疑謗すること。

四、異見邪釋を褒進して、三大上人及び了譽上人の正判を貶退すること。

五、持齋して念佛するを如法修行こし、唯一向に念佛するを不如法こすること。

六、芝山の所化おほく普寂が僻見を習て、歸國し傳說し、聽をして心行を僻越させしむること。

七、芝山にて普寂が講釋すれば、大衆おほく異見別解の爲に破壞せらるゝこと。

八、芝山の月席學頭まで普寂を講師こして座下に跧伏すれば、文盲愚昧あらはれて、他人の笑具こなること。

九、普寂が邪說を信受して、法華の妙義なる性具善惡を妄談こいへば、唯除誹謗正法の中に入ること。

十、芝山に許して普寂を置ば、天下の淨侶みな邪義を習て、眞宗を變じて邪宗こ成べきこと。

かくの如き弊風に處する對策こして大衆統率の事務に參與する月行事は次の如き三役を勤むべき事を大我は提言し、若し能はずしてしかも月席に坐するは尸位なりこ云ひ、儒教に說く「不レ得ニ其職一則去不レ去者殘賊也」の文を援引せられたり。卽ち三役こは

一、大衆をして宗風を振て疑雲を拂ひ、祖月を輝して迷闇を破らしめんが爲に、三經一論五部九卷選擇御傳を講じて

聖淨難易專雜得失を分別すべきこと。

二、大衆をして宗門の破壞を慮て法儀を改め、淨家の耻辱を顧て僧行を正さしめんが爲に台命の三十五箇條四家六派源流鈔等を講じて、顯異惑衆不淨說法を停止すべき事。

三、大衆をして他門の難鋒を挫き、自家の邪網を裂しめんが爲に華嚴法華俱舍唯識四敎五敎二敎論等を講じて、漸頓偏圓權實顯密を解釋すべきこと。

の三之れなり。要するに自家の眞風を宣揚し、僧行を肅正し廣く諸宗の敎義を敎へて撞着なからしむべきを提言せしなり而して大我は書中應々春秋の法に依りて貶するには名を稱すこてその文字を易へらる、卽ち寂默（釋迦）に隨順せざるが故に普寂を不寂と書き、不寂を師として邪敎を信じ芝山を擾亂するが故に鸞山を亂山と稱し、眞宗を貶退するが故に岱眞を退眞と書き、扶宗護法を怨讟する罪惡を顯して後人を驚覺せしむる方法とせり。その當意卽妙なる奇智その撰述の各處に伺はる。

扨て普寂を以て芝山に聘し講師となすことの非は啻に芝山の名譽に關するこの表面的理由のみに留まらずして、學侶養成の根幹はその初めこそ深重を要するものにして、先入の執見の改め難きことは恰も二乘の偏執を變じて一乘の圓解を開き難きと同樣なれば、若し不寂の邪說を聞き之れに執すれば學問の邪魔となり正解を得ること能はず先入の言は一生の障碍となる故扶宗の好心止むに止まざりし內面的理由この二あり。その所謂邪說とは卽ち「續芝談」に依るに

一、淨經は終敎と執し。

二、淨侶は無戒と執し。

三、持戒念佛は如法と執し、無戒念佛は不如法と執し。

四、唯稱念佛は上品上生の業に非ずと執し。

五、念佛行者の上上に往生すと謂ふは宗風なり、實には然らずと執し。

六、念佛は淺龕にして、修禪は深妙なりと執し。

と宗義上その六義を指摘せられたり。今その一々に就き大我の辨駁を精査するを要するも、此れ十弊中に該收せらるゝものにして、今はたゞ大我の眼に映じたる普寂の宗義に對する所說の概要を列擧せしのみに止めて、進んで台家性惡說に對する二師の所說を見ん。大我が普寂の性惡說を破斥せるは十弊を數へし中第九の如き邪弊を招くを匡救せんが爲めなりしなり。

註 一)普寂の傳記には「摘空華」(淨全一八、二七九頁)及び鸞山撰「行狀記」あり、されど大我に至つては何等傳ふべきものなく唯吉岡呵成師の「大我上人傳」(淨全一八、五〇九頁)あるのみなり。此等に依るに

普寂　寶永四年(一七〇七)――天明元年(一七八一)

大我　寶永六年(一七〇九)――天明二年(一七八二)

(二)普寂の「身にかけし法の衣は同じきも身はゞ合はねば脫ぎすてぞする」との國風一首を詠じて一鉢飄然舊里を出で專修念佛行に歸入せしは享保十九年(一七三四)にして、大我の「咲き散るも世のならひぞとみよしのゝ花の木かげに南無阿彌陀佛」と所懷を詠じて念佛の一行に歸依せるは享保十六年(一七三一)なり。而して大我の關西在住は眞察僧正の華頂晉董の年即ち天文三年(一七三八)以後にして、此年普寂は近江守山の淨土寺に住す。普寂の長泉院に迎へられしは寶曆十三年(一七六三)の事にして、大我の定月上人の請召に應じて江戸に赴きしは此れより數年後の明和年間(一七六四―一七七一)なり。

(三)寶曆十三(一七六三)　五教章　絲山

明和元　(一七六四)　俱舍論　同　雲察寮

同　二　（一七六五）　探玄記　同　千如寮
同　五　（一七六八）　法苑義林章　同
起信論義記　同
同　六　（一七六九）　唯識述記　同
四教儀集註　同
同　八　（一七七一）　法華文句　同　北溪
五教章行衍秘　同　同
安永元　（一七七二）　法華文句　同　同
同　二　（一七七三）　攝大乘論略疏　同　東溪
同　三　（一七七四）　探玄記發揮鈔　同　新谷
同　六　（一七七七）　起信要決　同　辨戒寮
俱舍論　同　南溪慈光寮
同　七　（一七七八）　四教儀詮要　同　辨戒寮

二

普寂の天台教義に關する著述としては「三大部復眞鈔」十七卷（註一）及び「四教儀集註詮要」四卷等あり、又天台部の典籍を講ぜしこと多年に及ぶ（註二）。

普寂の說く所は批判討究の先驅をなせるものにして明治年間より學界に注目せられ、從來一顧の價値もなき邪說なり

こせられしものが研究の對象こなれり。台宗教義に關し普寂は天台智者大師の眞意に反するものなりこなす點多々ありこ雖も最も主力を集注せしは、台家教學の中樞精華こなす性善性惡十界互具の法門なり。

此の台家教學の根本問題たる性惡論に關して疑義を抱ける普寂は、此の說行はれてより天台の眞義は沒却せられたるのみならず、又他宗を毒するここ亦大なりこて排擊之れ努められたのであるが、しかし普寂こ雖も台宗教義初學の折より此れを以て天台智者大師の眞意に反するのみならず佛教々理に反する說なりこ斷定せられしには非ずして、「摘空華」(註三)に依れば明和二年五十九歲以後のここなり。卽ちその動機は緣山天神谷千如寮に於いて探玄記を講ぜし際方等大乘の性理を領會するここを得たる結果に依るものなり。その間の消息をもらして師は同書に

往昔閉關凝思之切於大小三藏一闡思所成分齊粗得通曉一且深信得方等大乘是性海不思議曼荼羅一無所遲慮一但性善性惡之旨趣遊學之昔粗辨綱領一雖然知性惡之說其旨左謬一至其端的一曖昧回レ分至于今茲講探玄記一熟讀華嚴經說了然領會方等大乘性理如レ是性惡之說定是左謬一無復餘蘊一矣

こ述べらる。此の旨又「四教儀詮要」にもありて、此の理毒性惡の說は人法を利せざるのみにあらず、又之れは諸經論を驗するも典據なく且天台大師の所說中にも的證なき謬說であるこて、此の兩方面より徹底的に窮明して性惡說を根本より覆さんこて評論駁破せられたのである。

此の性惡法門の歷史を尋ぬるにその源は「觀音玄義」(註四)に出で、後荊溪が「止觀」を註するに及び第五の中に引用し具の義に約して其旨を明せり(註五)こ雖も未だ多くは論ぜざりしに、後趙宋に至つて四明講席を布くや卽の義に約して理毒性惡の說を鼎說せり(註六)。かくて天台大師に依りて見出されし珠玉は荊溪に依りて琢磨潤色せられ、四明に至つて盛んに價値を論じて萬城より重からしめたり。されこ普寂は此の發達を以て變轉こなし、殊に近世我國に於て此性

惡法門を一轉せしめたる主魁をば曾ての受學の師鳳潭なりとす。「四教儀詮要」卷一には

後之譚二性惡一者與二荆溪四明一其所レ言則極能相似而其旨趣則猶如二天淵一妄譚二卽具一愛二養陰賊一藉二口高妙一蹙二頞斷修一者蓋多矣增暉主（鳳潭）乃占二其魁一者乎性惡之說於レ是一變

と述べられたり。而して此の鳳潭に依つて一轉せられたる性惡說の弊はその極に達して圓人無修證の害毒を流すに至りたれば、普寂は鳳潭を境として此說を唱ふる者を前後に二分し得らるとして「起信論義記要決」卷下には

一類則如下夫荆溪四明及後代賓直正信承二彼說一者上約二眞如性不改一就レ具就レ卽以談二性惡一是也

一類則如二後代不賓直邪見者一僻二解妄陰卽是理毒性惡等不レ憎二陰賊一不レ怖二事惑一直認二已染惡心行一以謂二妙物一依二此法門一恢二張貢高我慢之情一是也

と述ぶ、此二類ある中に於いて前者は法門左謬りとは云へ心行未だ壞せざる機類にして、荆溪は性惡を說くと雖も尙其行相を窺へば事惡を懲らし戒身操持一時に挺然たり（註七）。又四明は陰是を談ずると雖も尙陰身を輕んじて修懺多年に及び三指を燒煉し志を焚躬に立つ（註八）。かくの如き行履より考察せば性惡の法を說くこと一見奇異に感ぜらるゝも要するに兩師の說く處は法性常徧を顯はす一法門なるのみである。されど後者の一類に至つては啻に理に戻るのみならず又教門を破壞するものである。卽ち染惡無過を執して高妙なりとし、無斷無修を認めて圓極なりとなす故、此れが爲めに止惡作善の情は弛緩し從つて息妄修眞の大道は廢絕す、されば正法を破滅することは此れよゝ大なるはないのである。

かくの如く性惡法門を說く者に二類ありと雖も等しく方等大乘の緣起に順ずるものに非ずして、殊に「起信論」に說く邪執對治に入る事は共に相等しとせられたり。故に普寂は此說を以て圓の宗極なりとなす者に問をなして「起信論義記要決」には

今試問焉此起信論者以圓宗極爲邪執而對治之論耶又終教所對治邪執在於圓教則翻然妙理耶

と述べて揶揄し、執見祟をなす時は假令廣學多智の者と雖も惑はざるを得ざるは理の當然とし、鳳潭は此性惡說に心醉し盲信したる故「起信論」の對治を見るも全く省覺する處なく、枉げて賢首を引いて人を欺惑する者なりとて論難駁擊することを恰かも讐敵を見るが如し。要するに台家の性惡法門を極端に心醉せるは鳳潭にして、此れを嫌忌することを蛇蝎の如く根柢より此說を驅除破却せんとせる者は普寂にして、共に相容れざる兩師のその在世年代の接するは奇とすべきなり。

吾人は以下更らに突進んで普寂の性惡辯を精細に觀察せんとするも、今本旨に入るに先立ち普寂は荆溪以後の諸師が性惡說を譚ぜし知解を如何に解せしや將又師の見解は如何なりしやを極めて概括的に豫知するは便宜を得るものと思ふ。乃ち「妙玄復眞鈔」第二（註九）には

籤主（荆溪）以爲性惡者眞如理性實乃非善非惡底今云惡性者感惡趣之性而其實則修惡也猶曰習成性是卽以修爲性（中略）以余思之此見甚不順方等經論及智者大師之意若是天台正旨則眞性卽一佛界心中道第一義諦眞善明淨也九界衆生由無明力不能如眞性而起焉攬眞性而爲己界己界成則自有己界十如而轉焉然九界是權故十如亦權也權卽似有而非有然則離非善非惡底眞如之外無九界性相之可得雖權性權起是惡眞性恒眞善明淨也何可得言性惡照明等乎

とありて、要するに荆溪大師が如是性を釋せるを反駁して智者大師の本旨に反するのみならず又方等大乘の諸經論の所明と齟齬するものなりと云ひ、自己の論陣を張らんが爲め「止觀復眞鈔」第三（註十）及び「四教儀詮要」卷一には五科の義門を設けられたり。今兩者の標目を並記すれば左の如し。

（止觀復眞鈔）

一、總以方等大旨一明
二、別擧二今宗一辨
三、辨二觀音玄眞僞一
四、此說已論所黜
五、明二此說轉引二群邪一

（四教儀詮要）

一、總於二佛教性起一辨
二、別就二天台所說一明
三、辨二觀音玄義眞僞一
四、明二此說是論所對治一
五、此說墮二情窩一轉引二邪執一

之れに依つても知らるゝ如く標目既に然り、その所說に至つては兩者全く符說を合するが如く、たゞその文辭に繁簡具略の差あるのみである。故に今「詮要」に依りて普寂の所說を一瞥せん。

第一に「總於二佛教性起一辨」とは凡そ佛教には大小權實等ありて、其性起を論ずるにも各々分齊あり。權小は且らく措くも實教に於いては悉く如來藏を以て教體となす。されば法華に於いても亦然りとし、如來藏を論じて

夫此如來藏心本來淸淨與二雜染法一而不二相應一是名爲レ空性具二恒沙功德一離染還淨表二示其相一是名二不空一無明所起三雜染法情有理無起便違レ眞滅處顯レ性福惠淨品性具實德起便順レ眞實善妙有全レ性起レ修是故對二治雜染一則空如來藏顯現是名二斷德法身一修二集福智一則不空如來藏顯現　云云

と云ひ、かくの如き空不空如來藏は眞性にして、此の眞に違して起れる雜染法を對治すれば眞性は自ら顯現して妄法は滅盡す、而して此の雜染法は本來空寂にして但一法界なりとなすは方廣大乘の樞柱であり、佛々同道の素範通宏の大理ならざるべからず。今此の大理に台家の性惡說を照合して次の如く難じられたのである。

雖レ由下智有二淺深一及障有中厚薄上而乘教異即レ階於二上所レ明通宏大理一則其致一撥寧容下盭二此大理一別立中如來藏性具雜染

法全レ性修起及以雜染法亦是眞用之異見ナ乎

凡そ諸經論の中に於いて雜染等につき卽こ說き又具こ說けることあるも、此れは智に約し又は空理に約し、如々に約せしものにして吾人の妄情を以て分別せし如き實の染惡ありて其れを以て直ちに妙物なりこなすが如きこは同じからずこ云ふのである。

第二に「別就ニ天台所說一明」こ云ふは、先きの佛敎々理より更らに範圍を縮小して台宗の敎義にも反する旨を明されたせるものなり。初めに

妙玄明ニ迹門十妙一中第一境妙者謂諸諦第二智妙者是諸智第三行妙者卽諸行此三如レ次三因謂正了緣也所謂正因乃如來藏心一佛界也是名爲レ實九界衆生由ニ無明力一全攬ニ藏心一爲ニ種々界一譬如ニ翳眼於レ空見ニ種々華一是名爲レ權以レ智照則權本非レ有權卽是實以レ情取則迷悟自隔權實條然其轉ニ卽レ實之權一以顯ニ卽權之實一是爲ニ法華之法門一

こ述べ、三因佛性に約して九權一實の轉變に歸着せしめ、其轉變に五重を設けられたのである。

第一轉　藏心內薰勝緣外資緣了二因開發則轉ニ惡五陰一爲ニ善五陰一

第二轉　轉ニ善五陰一爲ニ方便五陰一

第三轉　轉ニ方便陰一爲ニ無漏五陰一

第四轉　轉ニ無漏陰一成ニ亦有漏亦無漏陰一

第五轉　轉ニ亦有漏亦無漏陰一成ニ非漏非無漏不思議五陰一

こ云はれしもの之れにして、第三轉に至つて分段の三界は滅し、四敎の中藏通二敎は此分齊に當り、第四轉は從空出假こ名付られ別敎の所詮なり。第五轉は又從假入中こ云ひ圓敎の所詮なり。此位中因は十地果は佛地こ名づけ菩薩道に於

いて塵沙の惑を治し、十地位中に無明を破せば變易の三道これに於いて永く滅するものなり。要之九界は所轉にして三性に通じ五重轉變して一佛界に入り、緣了二因は乃ち能轉なりとす。かくて普寂は一佛界は本來寂滅虛空の如く全性修起なり、此の起と云ふも單なる起には非ずして起卽不起なる故眞性なり。而して九界は翳眼所見の空中の華の如く非有似有なるが故に權にして眞性に非ず。故に縱令性を說き具を說くと雖も是れ權性權具なりと。かくて「文句」第三(註二)の文を引用し十界三千互具互融　如來自行の權實にして、實は乃ち佛界の十如にして權は九界の十如なり。此の兩者は恰も天上の月と水中の影の如くにして、一月萬影二而不二、一佛法界機の所感に隨て十界の影を現じ、橫は十方を該ね竪は三世を貫き三千卽空假中なる故「三千非二三千一非二非三千一遮照同時存泯無礙」なり。凡夫は此理を具すとも隱覆して現はれず、二乘は空性を見て假中に達せざれば亦顯はれず、三賢の菩薩は空假を證すると雖も中を見ざるを以て亦顯現せず、登地以上は中道に悟入するも尙無明に覆はるゝ故分に顯はるゝのみ。故に九界の衆生は惑業力に依りて互具互融せず唯各々一界をのみ感ず。然るに如來は惑業永く盡き九界を超過し給ひ三千權實圓融無礙なるが故佛の一界のみ眞性にして餘の九界は無明所起なれば非有似有にして眞性にあらずと。然るに十界三千の法門を以て性惡說の根據とするが如きは全く執見により正智を昧却せし爲めにして、法華の三部及び其他「淨名玄疏」「光明玄疏」「禪門」「戒疏」等の中理毒性惡の說なく却て之れに牴牾する說のみなれば天台大師の所說には非ずして後人の大師に假托せし新說と稱すべしと云ふのである。

第三に「辨『觀音玄義眞僞』」と云ふは、從來性惡說を天台大師の眞說なりとし圓宗の妙旨なりと尊崇する台家はその說の源は大師の親撰「觀音玄義」に出づと說くを以て、普寂は性惡說は唯「普門品」の別行結疏たる「觀音玄義」(註三)に於てのみ明瞭に認められ他には此說を見出し得ざるを以て、大師に性惡の說あることなしと斷定せんとし「觀音玄義」

の眞僞如何を問題とし六個の證科を出し「觀音玄義」の本文討究を試み大師の親撰に非ずと主張するに至れり。而して「止觀復眞鈔」「四教儀詮要」共に說く處等しくして唯六證の順次顚倒あるのみなり、今繁を厭はず「詮要」の要文を抄出せん。

一、性惡之說不二翅遥二盤二諸大乘經論一亦枘二鑿於天台諸部之文一齟二齬乎天台所立之宗一(中略)一師所說胡爲如レ此氷炭也應レ非二智者正說一

二、中古以來以二性惡說一爲二台宗極一若是宗極則玄義境妙中文句第三明二十如是一中止觀第五明二陰境一中淨名佛道品疏等最宜レ說レ此而不レ說者何耶其餘天台諸部中無二此說一獨觀音玄孤然說レ之者何耶脫觀音玄逸二於水火一者天台宗極遽斷絕耶應レ非二智者正說一

三、凡天台諸部自製及以章安記錄其文雄毅其旨幽遠超然秀二於物表一彼觀音玄文義膚淺不レ見二高致一性惡一章庸俗殊甚比二諸正說一天淵不レ啻(中略)應レ非二智者正說一

四、性惡一章於二緣了二因一而立レ義是最奇怪矣壽量文句分明言二惡非二緣了一或言二緣了二一善一三部諸文並以二般若一爲二了因一開則爲二二十智一以二萬善一爲二緣因一統則五行所攝了因乃通大地法慧緣因乃善數及通大地數是轉二滅染惡五陰一以轉二成善淨無漏等五陰一之甘露也於二此甘露性德一而作二性惡說一詭譎之甚何至二於斯一也計此說謬二解一切法趣一之所レ致乎應レ非二智者正說一

五、性惡法門引二普現色身一以證レ之此亦深違二理敎一何者佛及極位大菩薩普現色身遍應二群機一是多劫熏修善根力成二滿大定智悲一衆生有レ感三輪自現(中略)普現九界卽法身性淨之德用豈容下以二性具レ惡而現中三惡等上乎華嚴般若涅槃等中說下普現色身不可思議是大定智悲所現非中法身自體實具二惡法一而現中惡道等上之文已多矣豈可下背二此理敎一別立中普現色

身由二性具一レ惡起之異義一乎此義特戾レ理天台旋持之辨豈有二此說一乎應レ非二智者正說一

六、天台諸文深斥二性過一將レ說二性理一必先遣蕩評二地攝通釋家一遮下其濫二外計一之失上是一家之洪格也然性具二染惡一之說與二僧佉自性之計一其旨吻合是天台之所二痛黜一也天台豈可レ作二此說一乎應レ非智者正說一

以上の如き六證を以て徹二徹尾「觀音玄義」は智者大師の親撰に非ずと斷定し、若し一歩を讓つて親撰なりとなすも少くとも性惡の一章のみは斷じて大師の眞說に非ずして後人の改竄を蒙むれるものなりとし「惟應下曾有二正說一原本遣逸後好事漢作中斯膺文上」と述べ「大乘止觀」「華嚴問答」等の例を引き共に僞言とせらる。因みに普寂は「起信論義記要決」卷中に於て證眞に黨して「大乘止觀」を以て南岳の撰に非ずとし「大乘止觀」中に起信の文を引用して善の字の下に惡の一字を加へたるも現流本には無しと云ひ、「今此用大者報化二身大用豈容レ生二惡因果一乎」と論じ「製二此書者一之昧教可レ察」と述ぶ。されど眞如體大に善惡の法を具すこの思想は實に「大乘止觀」一部の一偉彩にして智者大師の性惡思想の淵源又此處にあり。「觀音玄義」を以て僞作となせしは普寂を以て嚆矢となすことを得ざるも(註一三)。其の所論の精細を知り得るは普寂に初まる。

第四に「明二此說是論所對治一」とは性惡說は起信論の邪執對治の金文(註一四)の所對治に當るものなることを論ぜしものなり。蓋し起信論所說の法義は方等實教の通宗にして、如來藏緣起に依り法門を建立するものは皆此法義に依りその綱紀を建てざるものはなし。故に終頓圓教の分るゝは惑の濃淡智の淺深に由るものなりとす。而して三教異るとはいへ如來藏心空不空三性二無性二無我の綱紀は異りあることなし。かゝる見地に立てる普寂は終教所說の如來藏性は生死雜染法を具せず、具すと計するは邪執なりと遮すにも係らず圓教に在ては翻然として如來藏性生死雜染法を具し、その具を譚ずるを以て却て妙解なりと稱するが如きは奇怪も甚しく理として妥當ならざるを以て極力破斥せられたのである。

第五に「此說墮二情窩一轉引二邪執一」とは既に述べしが如く性惡說轉變史上より考察して、時代の經過と共に僻邪に入り近代の情勢を大觀し、その將來を忖度すれば此說に倚託して大僻見を招致せんことを恐れ、其末流を止めんには其濫觴を防がんには若かず、之れ此の性惡の是非を論ぜし理由の一にして、他は理論上性惡說の成立せざるを論じ、更らに

惟夫性理深立非レ佛難レ窮登地已上隨分證會地前三賢隨順比知善趣已前只仰推二如來一耳然則未レ見二諦迹一者唯於二明了了地經論及以天台正說一聞思熏修正解已立便修二止觀一是台學之正軌也

と述べて性惡說を以て新奇未了の說とし、凡そ學佛道の要に止惡行善、息妄修眞、眞妄不二の三重ありとす。即ち初重は十信の所行にして第二重は三賢乃至七地の道であり第三重は八地以上の道なり。而して此の三重は順次進轉すべきものにして初二重を成ぜずして第三重を得ることは道理上なし。第三重妄即眞等は是れ妄盡き眞極る者の智境界なれば妄意此れを說けば動もすれば邪僻に入るものなり。故に普寂は

近代性惡法門興二盛干世一說レ卽說レ具於二染惡等一多安二美名一於二權小道一彈レ力彈棄纔聞二此法門一則雖二質直正見者一荏苒乎革惡遷善之情弛緩焉息妄修眞之心退沒焉況其不質直不正見者駸駸焉陷二於罪惡無過煩惱不障道之邪阬一豈可レ不レ懼哉

と述べて性惡說の非を鳴らしたのである。要するに普寂は如來藏心は本性如々湛として虛空の如く非善非惡なり。若し翻染還淨に約すれば則ち無量の性功德を具し世出世の善の因果を生成す、故に纖芥の善も悉く本性の德用なり。されば諸經論中善を以て性を說くは稱性の妙說にして、惡は虛妄分別より起り虛妄分別は二執より起り二執は無明より起る。是の故に三雜染起れば性の寂照二無我に逆らひ、性に逆つて起れるものは情有理無なり。故に佛知見を以て法界を觀照せば但一如來藏心一道淸淨一乘大善開けば則ち六決定にして、之れを萬善同歸の妙法蓮華と名くと解せられたり。故に今家性惡を譚ずるに會ひ驚倒して曰く、「怪哉弘二通法華一之家蘖二出性惡法門一也可レ謂水中生レ火之類乎」と。宣哉師が嘆

聲亦自然の數と謂ふべし。何んとなれば普寂は常に華嚴思想を以て天台に同せしめ如來藏を以て今經の體とし眞如緣起の原理に包含せしめたれば諸法實相の玄底を叩き得ず、殊に別圓不離の說を唱え實踐を重んじたる結果漸修的態度を外にしては何等の法門をも認め得ざりしなり。此れ師が夙に絕對他力の眞宗敎團を脫して專修念佛の淨土敎團に歸入せし風丰と合致し首肯せらるゝ根本概念なり。更らに普寂は性相學者に通有なる倫理的觀念を固持せし爲め一乘法門の幽致を搜り得ずして華天兩家に容れられざりしなり。然るに正統派より目せらるゝこと蛇蝎の如くなりしとは云へ又其異端的述作の台學者に敎ふること多きは、例へば劇毒藥の研究が現代藥劑界に重要なる分野を占め益する處多きが如く、世間數多の誤謬なき著作よりも却て吾人を啓發する處多き過謬なりとして普寂の著述に異數の價値を認めざる可らず。

註(一) 日本佛敎全書第二十三

法華玄義復眞鈔　六卷
法華文句復眞鈔　六卷
摩訶止觀復眞鈔　五卷

(二) 明和六　(一七六九)　四敎儀集註　綠山
同　八　(一七七一)　玄義、止觀　禪林學士の請による
文　句　綠山　北溪
安永元　(一七七二)　同　同　同
同　七　(一七七八)　四敎義集註詮要　同　辨戒寮

(三) 淨　全　十八卷(P.298b)

(四) 大正藏　三十四卷(P.888c)

(五) 大正藏　四十六卷(P.296a)　「及び止觀義例」卷上(大正藏　四十六卷P.450c)にも說示す。

(六) 四明は山外の唯心的見解に對し實相論の眞實義を闡明する爲め性惡說を次の如き諸書に於て力說す

觀音玄義記　卷二　(大正藏　三十四卷P.905a)

十不二門指要鈔　卷上　(大正藏　四十六卷P.707b)

觀經疏妙宗鈔　卷一　(大正藏　三十七卷P.200a)

四明尊者敎行錄　卷二　(大正藏　四十六卷P.872c)

同　　卷三　(同　同　P.8.0c)

(七) 宋高僧傳　第六　(大正藏　五十卷P739b)　佛統記　第七　(大正藏　四十九卷P.188c)

(八) 佛祖統記　第八　(大正藏　四十九卷P.191c)

(九) 日本佛敎全書　二十三卷(P.50b)

(十) 同　　二十三卷(P.459a)

(二) 大正藏　三十四卷(P.43a)

一一界皆有二九界十如一、若照二自位九界十如一皆名爲レ權、照二其自位佛界十如一名レ之爲レ實、一中具二無量一、無量中具レ一、所以名二不可思議一(中略)凡夫雖レ具絕レ理情迷、二乘雖レ具捨離求レ脫、菩薩雖レ具照則不レ周名二不了了一、如來洞覽橫豎具足

大正藏　三十四卷(P.43b)

此是如來自行權實最爲二無上一、無上相乃至無上果報、橫廣豎深而無有上、故標章云諸法實相也、例亦應レ言二諸法實性實體實力一、乃至應レ言二實究竟等一、但略擧レ一而蔽レ諸耳、如來遍照橫豎悉周如レ觀二掌果一、秖爲下凡夫如二雙盲一、二乘如二目眇一菩薩夜視朦朧不上レ曉、

（一二）大正藏 三十四卷（P.882c）

（一三）前田慧雲氏「天台宗綱要」（P.177）

（一四）大正藏 四十四卷（P.277b）

聞下修多羅說中一切世間生死染法皆依二如來藏一而有一切諸法不レ離二眞如一、以レ不レ解故謂三如來藏自體具二有一切世間生死等法一、云何對治以下如來藏從本已來唯有二過恒沙等諸淨功德一不離不斷不異眞如義上故以下過恒沙等煩惱染法唯是妄有性自本無從二無始世一來未中曾與二如來藏一相應上故若如來藏體有二妄法一而使二證會永息已妄者則無レ有二是處一

三

上來普寂の性惡說の概要を述べたるを以て、此の普寂に依て教界に投ぜられし一石の描ける波紋を考察せざる可らず最初に此れが辯駁を試みたるは天台にありては觀國なりこせらるゝも其れこ時を同じくして我宗に大我あるここを思はざる可らず。而してその何れが先きなりしやを今急遽速斷するは困難なるも恐くは大我を以て嚆矢こなすも大過なかるべし。何んこなれば恐くは大我はその住居の地を同じくし間接に普寂の學說を常に聞く機會に惠まれたるが故なり。殊に普寂の性惡說に直接關係ある述作及び上梓は左の如し。

明和五年（一七六八）起信論義記要決著作

明和八年（一七七一）三大部復眞鈔著作

安永五年（一七七六）起信論義記要決刻成

安永七年（一七七八）四教儀集註詮要刻成

依て觀國が起信裂網疏講錄を著せしは必ずしも安永七年以後には非ざるもそれより多くは遡り難かるべし。卽ち三大部の講述は禪林の學士大成仙靈の懇請に依り明和八年春より開かれしものにして立義止觀を秋迄に講了し、文句は歸東後緣山に於て講じ翌安永元年二月迄續講せり、依て言はるゝ如く講に隨つて疏を製したるものこせば三大部復眞鈔の完成は安永元年にして、止觀復眞鈔の卷尾にある。

維持明和九歲次壬辰春二月十七日酉中刻閣筆於三緣山三島溪學寮

の文こそ普寂の脫稿を意味する者なり。されば此れが他宗の學侶に轉寫研究せられしには數歲の日時を要せしなるべし

然るに大我の「性惡論」を著はせしは自序に依れば明和九年（十一月十六日安永改元）秋八月にして「復眞鈔」完成直後なり。次いで翌年には「遊芝談」を作りその中に於いて「性惡論」に對する普寂一派の評言を再破指彈したる等より推察せば普寂の所見を最初に挫破せるは大我なりこ推定するも事實に遠去るものには非ざるべし。此處に問題こなるは「四教儀集註詮要」の製作年代なり。「復眞鈔」の如く講に隨ひ疏を製したりこせば明和六年にして、既に觀國は「復眞鈔」以前に「詮要」に依りてその詳細を知悉し「性惡論」以前に「裂網疏講錄」を著はせりこ推定せらるゝも、若し然りこせば大我の「遊芝談」に何等それに關する風評及び己れこ所見を同じうする觀國の名をも出さゞるは奇怪こ云ふべし。

「性惡論」一部は七紙に滿たざる小部なるものこは云へ、先づ台家性惡法門は諸宗に超過する圓談なる所以を理を窮めて說き、次いで性惡を疑謗する普寂說を道理文證を以て破斥せり。「遊芝談」は安永二年芝山に於て友こ語りし對話を一篇の書こなせる體裁にして全篇二十一の對話よりなり、その中前八對話が台家性惡說に關するものにして、之れは先きに著せし「性惡論」に對し普寂說を支持する學僧の評言をば一々反駁を試みたるものにして、他は淨土宗義及び普寂の言行に關するものなり。更らに他に明和七年に刊行せられし「續芝談」あり。內容二十問答より成り、その中台宗性惡

に關するは第十二より第十四に至る三問答なり。而して大我の性惡辨の精義は「性惡論」に依り窺ひ得らるゝもその全貌を知らんとせば他の二著を參照せざる可らず。

大我が普寂の性惡觀を論破せし要點は普寂が性惡法門は唯「觀音玄義」にのみありて大小の三藏等に於て典據なく天台の諸部に亦的證なき等より考察せば後人の僞作にして、此性惡說は學佛者を利することなきのみならず却て無修無斷の僻見を助成するものなりと論難せしをば道理上排擊するに努めたるものなり。初めに普寂は大小の三藏に典據なしと云ふも性惡法門は法華の妙體諸佛の秘髓にして唯佛と佛と乃ち能く究盡す、故に權大乘經にあるの理なく況んや小乘律に於いては勿論なりと一蹴せらる。されば師のかゝる論を爲せし根本思想を伺へば「性惡論」に

諸法實相不レ出二權實一諸法是同體權中善惡緣了、實相是同體實中善惡正因、九界十如卽惡緣因、佛界十如卽善緣因、蓋斯諸法實相者、法華之妙體、諸佛之秘髓、稻麻職聞、竹葦菩薩並不レ能レ知二此義少分一也、於戲、大師非二實發一得法華三昧一矣爲レ如レ是妙說二性惡一以示二實相一哉

とあり。更らに普寂は三大五小に的證なしと云ふも止觀に三千を明し玄文に千法を示すは言は異るとも義は此れ一にして性具を廣釋するものなりと述べその義一なる所以を示して

大師義然立二三千法一職由二法華所謂性相體力作因緣果報究竟、華嚴所レ謂能隨染淨緣遂分十法界、智度所レ謂假名世間國土世間五陰世間一當レ知總持二十如一賦二於十界一十界各具二十界一遂成二百界千如一假名一千國土一千五陰一千如レ此三千具二足一念一云然則性具二十界一十界者何四聖六凡、九界望レ佛皆名爲レ惡謂二之性具一惡矣

と云ひ、以て的證なしと速斷するは輕擧なる旨を主張し、普寂は四明が「觀音玄義記」に既に此の道理を示されしを見ずして、性惡は四明に始まり天台の正義に非ずと云ふも、若し實に性に九界を具することなしとせば如何にして百界千

如は成立することを得んや、百界千如成立せずんば三千の法は何に依て立つことを得んや、普寂は法華の妙極たる三千の法を破壞せんとするものなるかと痛破し、「觀音立」を僞作となすを駁して

夫觀音立義開二示蘊奥一文法班然如レ織二錦繡一一字半句不レ可二添削一也（中略）夫具之一言含二三大妙敎一頓入二佛知見道一之直指其猶レ稱二萬中有二十百千一也。

と述べ、普寂の性惡の一章殊に庸俗なるに依り徵するも好事漢の膺文を作れるものにして學佛者を利することなしと云へるを大我は一部の始終文理內容上より一點の疑念を抱く餘地なきことを辯護し、普寂が五門六義を擧げて性惡の是非を辨ぜしを總破して

夫性惡辨列二十證一皆是牽合傳會不レ當二以辨二性惡之敎一其猶下醉翁背レ的而發二十矢一自喚二皆中一使中見者捧レ腹而絕倒上也

我豈競二夫妄談一以費二筆墨一爲二豪傑一所レ嗤哉

と述べ、法華の妙極を疑謗する者如何んぞ法華を解說すと爲んやとて佛藏經（註一）の文を引き不淨說法なりと云ひ諸の衆生をして大衰惱を受けしむる惡知識邪見者なりとて霜烈なる言辭を以て評破せらる。その意氣たるや壯、何人も當る可らず、その言々句々には燃ゆるが如き護法の精神の溢るゝを感受せられるのである。かくの如き大我の破文に對して普寂及び緣山に於いて敎を受けし學徒より辨駁の書なきを頃日物淋しく感ぜしに偶々「遊芝談」を見るに左の文あり

普寂謂レ徒曰吾讀二性惡論一反二吾所レ志無二一足レ論故不レ辨也

此の一文之れより推察せば大我が「性惡論」「遊芝談」「續芝談」等を出して攻擊を加へたるにも係らず、何ら答ふる處なく後世一方的論難にして普寂全身瘡痍を受け再起することを能はざりしが如くにも思考せらるゝが、上揭の文によりて普寂の心境極めて平靜、その筆を起して文を草するにも足らざる正鵠を得ざるの論として看過せしものゝ如し。されど

「性惡論」の反響を見るに大要左の如き數項となる。

一、尙㆓曹寂㆒曰者往々繙㆑論曰皆是土梗不㆑足㆓敵㆒吾師粹辯㆒也蓋吾師職由㆓干長水雲棲㆒二大師㆒奚不㆑辯㆓夫二大師㆒唯辯㆓吾師㆒哉

二、師㆓曹寂㆒者貶㆓讀性惡㆒以爲㆓邪見㆒且謂華嚴不㆑說㆓性具㆒善惡㆒此所㆓以疑謗不㆑信也

三、彼徒怒㆓公謂㆓糠僧糟衆㆒曰甚哉逸言非㆓釋子之所㆑爲也

四、彼徒以㆓公不㆑論㆓夫辯出㆓十證㆒爲㆑不㆑足㆓以屈㆓吾師㆒也

五、曹寂自稱㆓比丘㆒比丘何墮㆑獄耶然公謂㆓曹寂及徒當㆑墮㆓無間獄㆒此豈非㆓流言㆒哉

此の中に於いて最も主要なるべきは第一第二にして、大我は此れに對し「遊芝談」に於て詳論せり。仍ち第一に對しては長水雲棲は別頓を宗とするものには非ずや、さればいかでか圓頓の妙趣を親ふことを得んや。懷則の「天台傳佛心印記」(註二)に云へる「只一具字彌顯㆓今宗㆒以㆑性具㆑善他師亦知具㆓惡緣了㆒他皆莫㆑測」の文を援引して、兩師は知らずして性惡を破せる故敢えて朱紫を辨ずるの要なし、されど曹寂は此れと類を異にする旨を論じて

曹寂嘗講㆓俱舍唯識及華嚴㆒次詆㆓挫性惡之敎㆒此由㆑非㆓其所㆑親我不㆓敢辯㆑之也而今講㆓法華玄文㆒辯㆓性惡㆒爲㆓邪敎㆒猶㆑入㆓其國㆒而敵㆑其王㆑我所㆓以振㆓辯刃㆒是也

と述べ、講を爲すは卽ち權實を窺測し、宗趣を分別し探玄索隱して、要を撮て今人の疑ひを解き、信ずる所を論じて聽徒をして佛祖の室に入らしむべきものなるに、曹寂は經論を釋するに當つて右の事をなさず、古人の是とする所を非とし古人の非とする處を是として、聽徒をして是非の間に迷はしむるものにして、長水雲棲に黨する如きは恰かも狐狸に與みして虎を噬んとするが如しと評せらる。

第二の問題に對しては大我は道理上華嚴家の常套語なる「三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別」の文を解して三界者何欲色無色卽是六道此說二性具一惡也巍乎若言レ非レ說二性具一惡何謂二三界唯一心心外無二別法一哉況至二於心佛及衆生是三無二差別一則性具二善惡一喚乎如レ日又況至下於說中能隨二染淨緣一遂分中十法界上則非二修現一性而何也

ニ云へり、從つて起るべき難詰は性具の義華嚴經にありニせば四明が「具二惡緣了一他皆莫レ測」ニ云へるは妥當ならずニ稱せざる可らず、此れに對して大我は法華經方便品に明す一大事因緣の文を取意して引き、此の明鑑に照して

我信二佛語一普見二諸經一無二一不一說二眞如實相一雖レ然隨レ機所レ見各爲二差別一其猶二人水鬼火魚宅一也

ニ述べ華嚴經に性具說はあれども未だそれを開闡するを得ず、唯獨り天台大師のみ佛知見を開きて性に善惡を具するニを顯はし給へり、かゝる方面より「他皆莫レ測」ニ述べられしものにして他ニは他經の意に非ずして余師の意なるニを以て第二の難を完全に退去せしめられたのである。

註(一) 大正藏 十五卷(P.794a)

(二) 大正藏 四十六卷(P.964a)

四

上來普寂の性惡論ニそれに對する大我の辨駁の大要を述べたり。既に一言せし如く大我は「性惡論」ニ「遊芝談」ニの兩著を以てしたるに對し普寂は此れに一度も酬ひざりしは吾人の深く遺憾に感ずる處なり。今兩師の所論につき想起すべきは吉岡呵成師の評言（註一）なり。

遊芝談を造して普寂律師を指彈し盛んに論鼓を鳴す。爾時高齡六十六、以て其老て益々壯なるの意氣を見るべし。是

より先き性惡論を述して律師を貶挫し扶宗編を選して闢通和尙を痛斥す。其立義を評破するや微を穿ち細に入り鑿々肯綮を衝く、二師亦存命世の偉器、意ふに必ず其說あらん。但大人の相爭ふ往々內鑑冷然たるものあり漫に後世白面小子の私議を容さゞるなり。

の言吾人大いに銘記せざるべからず。

天台學の立場にあつて性惡說を擁護するに努め巧緻の筆陣を張られし雄は大我こ觀國にして、その中烽火を擧げし大我を我宗團內に見出すは快事なり。

註㊀ 淨　全十八卷(P.520a)